

# 天地人を語る一直江兼続の義と愛

■平成21年6月19日/日大講堂

東京支部では、支部総会第45回総会記念企画として、去る6月19日午後5時から、NHK大河ドラマ「天地人」原作者の火坂雅志先生をお呼びして、記念講演会を開催しました。以下に、その概要を掲載します。

なお、当日は定員500名の会場があふれるばかりの会員が詰めかけ、予備の椅子を出してなお、立ち見が出る盛況でした。地元上越に生まれ育った会員の多くにとっても初めて聞く話も多く、一同満足して支部総会に向かいました。



## 【講演者火坂雅志氏略歴】

1956年生まれ、新潟市出身。県立新潟高校を経て、早稲田大学商学部卒業。著書は、『黒衣の宰相』『全宗』『虎の城』『覇商の門』『壮心の夢』『臥竜の天』『軍師の門』『沢彦』など多数。

『天地人』で第13回中山義秀文学賞を受賞、2009年NHK大河ドラマ原作となった。



歴史小説家の火坂雅志です。今日は、よろしくお願いたします。

今年新潟県は、「天地人」で盛り上がっているそうです。実は私の作品では、他にも大河ドラマの候補になっているのですが、私の出身地である越後を初めて書いた作品が今回大河ドラマになりました。そうでなければ越後に戻ることができなかった、顔向けできませんでしたから、本当によかったと思います(笑)。

## 1. 大河ドラマ化に当たって

### ■雪国の心

ドラマが始まる前に、NHKの内藤チーフ・プロデューサー、脚本家の小松江里子さんとお会いしました。どんなドラマにしたいか、という話の中で、私は、「原作の中にすべて込めましたので、あとは自由にやってください。どんなに面白くしてもらっ

てもかまいません」と申し上げました。

ただし、一つだけ、「これだけは忘れないでください。それがなくては私の原作である意味がなくなる」とお願いしてきました。それは「雪国の心」を必ずドラマの中で表現してくださいということです。原作者から「たった一つ」と言われて、NHKも考えてくれたのでしょう。チーフ・プロデューサーも雪国の心とはいったい何かと悩んだでしょう。

私は、苦しい時、困難があってもそこから逃げずにじっとがまんをし、そこで力を養い、やがて春になったら美しい大きな花を咲かせる力、これが雪国の心だと思っています。寒い冬の中で培われた越後人の粘り強さですね。これがドラマ全体に表現されていると思います。例えば、甲斐から景勝に嫁いだ菊姫が雪割草を見せられて、心を開いていったシーンです。雪の情景を大変美しく描いています。ふるさとである越後ってこんなにきれいなところだったのか、と思いました。何ともいえない情景を表現してくれています。また、景色の美しさだけでなく、そこに生きる人たちの情誼の厚さ、信義を守る部分をよく表現してくれています。

それを描いてくださっている脚本家、チーフ・プロデューサー、演出家、制作に携わっているすべての皆さん、そして上杉謙信の義の心とは何ぞや、直江兼続の仁愛とは何ぞやと、真剣に、一生懸命演じてくださる役者の皆様に、感謝の心でいっぱいです。

## ■役作りは酒から

北村一輝さん演じる主君の上杉景勝、無口だが、腹が据わっています。それに仕える、5歳年下の妻夫木聡さん演じる主人公の直江兼続は長身でハンサム、話がうまく、知恵にたけていました。この二人が一年間を通じて重要な役回りになります。

どんなふうに関わりを始めていったのか、お聞きしたことがあります。まず二人で酒を飲むところから始めたそうです。越後は酒どころ、ちなみに私も日本酒が好きですが、私の小説の中には酒を飲むシーンがたくさん出てきます。上杉謙信も酒好きです。大酒飲みだったそうです。手柄のあった家臣には謙信自らが酌をする、それが家臣にとって最大の名誉だったといえます。

北村さんも妻夫木さんも、二人で日本酒を酌み交わすところから役作りをしていかれた。それを聞いて、越後人として、間違いないところから始めた、越後の文化をよく理解してくれていると、うれしく思いました。

## ■名子役加藤清史郎君

「天地人」の1回目・2回目は、兼続の子ども時代から始まりました。私も見ましたが、あの与六役の加藤清史郎君はもう、名子役ですね。幼い彼が父母と別れたくないというシーンでは、全国の方々が涙したのではないのでしょうか。主演の妻夫木さんもテレビで彼の演技を見て、思わず泣いてしまったそうです。「自分より上手いじゃないか」と驚かれたとも聞きます(笑)。

父母と別れて学問を積み、ということで

雲洞庵に入れられます。北高全祝という、曹洞宗の名僧との出会いがありました。ちなみに、謙信の有名なエピソードの一つに、武田信玄が今川、北条による塩留めにあったときに、ライバルであるにもかかわらず塩を送ったという話があります。学者によると、謙信は実際に塩を送ったのではなく、このときに塩留めをせず、自由に流通させたのだそうです。「義の塩」ですね。信玄だけではなく、甲斐の人々も大変喜んだといえます。これを助言したのが、実は北高全祝だと言われています。武田信玄も全祝に感謝し、後に武田領内の佐久に寺を建てて招いています。

## 2. 謙信から受けた薫陶一義と利

### ■ 第一義と義

林泉寺の山門には、謙信が書いた「第一義」という額が掲げられています。高田高校の体育館にも「第一義」の額が掲げられていると聞きました。よく「高田高校の出身なんですが、“第一義”の意味は何ですか」と聞かれます。

これは、もともと仏教用語です。ですから、寺であれば他にも見ることができます。例えば、京都郊外にある黄檗宗の万福寺の山門にも「第一義」があります。『天地人』を執筆するときに、林泉寺に取材に伺って和尚さんにお話をお聞きしましたが、そのときに難しい話をたくさん語られて「禅がわからずして上杉の物語は書けんぞ、喝」と言われてしまいました(笑)。

私は仏教家ではないので、詳しくは説明できませんが、もともと中国の梁の武帝と

禅宗開祖達磨大師の話に出てくるものです。要は、「とんでもなくすごいもの」が第一義であると聞きました。仏教の中で、究極の真理を指す言葉だそうです。上杉謙信の掲げた第一義は、謙信がよく「義の男」「義将」と言われることから、この「義」と間違われることが多いのです。

戦国の乱世に勃興していった人物には、「梟雄」と呼ばれる種類の人間が多かったのです。裏切り、暗殺、謀略…主君や父親といえども平気で追放してしまうような人々です。謙信は、そこに疑問を持ったのです。乱れた世であっても、背筋を伸ばし、胸を張って生きるべきではないかと考えました。そして掲げたテーマが「義」だったのです。私利私欲ではなく公のために自分に何ができるか、それを念頭に置き行動した、当時としては珍しい武将でした。こういう武将は、戦国時代には他にいませんでした。

### ■ 経済と義の両立を図った謙信

しかし、もう一つ彼のやったことがあります。

上杉謙信というと、毘沙門堂にこもって三日三晩祈りをささげたり、お告げを聞いて勇躍出陣、そして天才的戦術で勝つというイメージがあります。確かに神仏は信仰していましたが、これはあくまでも一面にすぎません。彼はリアリストでありました。謙信は経済政策を大変よくやった武将です。

用水を引いての新田開発、戦国時代一の高根金山、魚沼の上田銀山などの開発、そして殖産興業です。なかんずく、越後上布

という特産品の生産。越後上布の原料の青苧の繊維が上質のものとして、京の都でも大評判を博したのです。これによって謙信は、巨万の富を築くに至ります。学者も、上杉謙信は数多い戦国大名の中でも最大の経済力を持っていたとみています。

しかも、当時の流通ルートの幹線は日本海です。冬を除けば、太平洋より穏やかです。船は陸上交通の1,000倍くらい運びます。越後から遠くは蝦夷の松前、そして越前敦賀、若狭小浜といったルートで、舟運の輸送力を活かし、越後に経済大国を作り上げました。この辺が、今まであまりスポットが当たっていませんでした。謙信は、経済と義の両立を図ったのです。いくら義といっても、食えなければ兵や領民は付いてきません。経済力があつたからこそ、大変な求心力を持ったのです。

こうした謙信の一番弟子と呼ばれたのが、直江兼続です。



## ■ 謙信の死と信長の台頭

ところが謙信は、49歳のとき突然倒れます。春まだ浅い、城中の厠での出来事でした。脳溢血だったといいますが、4日間意識を取り戻すことなく亡くなります。

当時兼続はまだ19歳、景勝も5つ年上の

24歳でした。若い主従です。謙信は遺言を残しませんでした。誰が跡継ぎになるか生き残りをかけて、三郎景虎を倒すことに全力を挙げます。それゆえの内乱「御館の乱」で、大きく版図を拡げていた大上杉王国が疲弊し、越後以外の領地の多くを失います。それと同時に、織田が急速に台頭してきます。

織田信長は戦に強いというイメージがありますが、実はさほど戦そのものは強くなかったと言われています。むしろ、信玄、謙信のほうが何倍も戦上手です。東日本の竜虎と呼ばれたこの二人が生きていたとき、信長は一度も勝利していません。武田信玄の上洛の折には、三方ヶ原の戦いで信長は大変なピンチに陥ります。先鋒の徳川家康は完全に敗北しました。家康はこのときの敗戦を絵師に描かせて後々まで戒めとし、敗戦から学んでいきました。

そして、信長は武田信玄、次いで上杉謙信の二人が病死することで台頭し、逆に武田、上杉を脅かす存在になりました。最初に潰されたのは武田です。そのあとすぐに、上杉も攻めます。四方囲まれた上杉は、最大のピンチを迎えます。越中魚津城で80日以上にわたって攻防戦を演じていたら、その間に信長は、明智光秀のクーデター・本能寺の変によって死んでしまいます。滅亡のピンチを脱します。

そして、その後いくつものピンチを、若い景勝、兼続の主従が知恵を振り絞って何とか生き残りを図っていきました。

### 3. 「愛」の武将兼続

#### ■兼続の兜の「愛」とは何か

ところで、直江兼続は、兜に「愛」の一文字を掲げています。この「愛」の由来については二説あります。

一つは、戦の神である「愛宕大権現」「愛染明王」の一字をとったという説です。主君の謙信が「毘沙門天」から「毘」としたのに倣ったともいわれます。前立てに神仏を祀るのは、当時の風習からいっても合理的です。それでこの説は、研究者、特に若い研究者の間で、主流となっています。

もう一つの説は、兜を納めた上杉神社がある、山形県米沢市で長く伝えられてきたものです。前立ての「愛」は民を愛する「愛民」の「愛」だということです。これを聞くと近代民主主義のような、あるいはフランス革命のときの「博愛」のようで、戦国時代にはそぐわないのではないかと疑念がわきます。

私もかつて軍神説を採っていました。新潟日報に『天地人』を連載することになった時、当時の学芸部長といっしょに春日山に登ったり、郷土史家の花ヶ前盛明さんをはじめ、いろいろな方に取材をしたり、お会いして話をしたりしました。そんな中で、学芸部長に「二説あるそうですが、どっちを採りますか」と聞かれたんです。私は「愛宕大権現だと思います」と答えました。

しかし、対照的な二説のうちどちらを採るかで、主人公の人物像は、かなり異なってきます。自分の中で主人公像をつくるために、いろいろ考えました。そしてついにわかりませんでした。私が考えてすぐにわ

かるものなら、これまでどうに結論が出ていたでしょうから(笑)。いまだに二説あるということは、そのどちらもが、もう一方を駆逐できるには至っていない状態であると思うようになりました。

#### ■「謙信公語類」にあった「愛」

とうとうわからないままに連載が始まってしまいました。書きつつ調べていくうちに、資料の中に「愛」の文字が出てきたのです。それは「北越軍談・謙信公語類」といいます。語類というのは謙信の言葉を集めた語録です。

この語録の第一箇条目に「天地人」が出てきます。天の時、地の利、人の和で、中国の孟子が言った言葉です。これを謙信は武将、又は君主としての理想像だと言っています。そして、これまでにこの3つが完璧に整った人物はおらず、これからも現れるとは思えないと言っています。しかし、天地人を徐々に整えていけば、やがて争いのない世になるだろうとしています。『天地人』というタイトルは、ここからとりました。

そして、四箇条目に出てくるのが「愛」です。謙信はまず、大将は戦に強くなければならないと言っています。しかしそれだけでは真の大將とは言えない、「仁、義、礼、智、信」という心で自分の身を律しなければならぬと言っています。

「仁」は、弱い立場の者への思いやり、情け、これは上に立つ者の心構えとしています。

「義」は、正義・信義の義です。私利私欲

のためでなく、公のために何ができるか念頭に置いて行動しなさいということです。

「礼」は、礼節。大将は独りよがりになりやすいので、まず自ら礼を知ること。

「智」は智恵の智です。困難に際し、智恵を振り絞ってこれをしのぐことです。

「信」は、人を信じることです。人を信じなければ信頼関係が保てなくなります。

これらを儒教では五常と言います。

さらに謙信は、慈愛をもって衆人、すなわち民を憐れまなければならぬと言っています。これができてこそそのリーダーであると説いています。これはまさに、米沢に伝わる「愛民」ではないかと思いました。謙信がそう言っているなら、兼続もその影響を受けているはずで、それで、執筆を進める上で愛民説を採るようになり、兼続の人物像といたしました。

### ■佐久市近代美術館にあった「愛」の軍旗

「愛」についての上杉家の資料は、他にもありました。長野県佐久市の近代美術館の倉庫の中に眠っています。

なぜ佐久市にあるのかということからお話しますと、上杉が越後から会津を経て米沢へ遷った時に、軍旗や川中島合戦のときの上杉謙信の大馬印をはじめ、先祖代々の重宝もすべて移動していきました。時代が下り、明治維新の後、苦しくなった大名家から様々な宝物が売りに出され、流出しました。これらを、長野県中野市の名望家が収集し、私設博物館で保存、展示していました。この方が亡くなって、品物は佐久市の美術館に寄贈されましたが、なにぶん

歴史博物館ではなく近代美術館なので、展示をしておくことができない、それで、今も倉庫に保管されているということです。新潟県には今、上杉家ゆかりのものはほとんど残っていません。こういう品々をぜひ新潟県が買い戻し、ふるさとに持ってきたいと思いたしますが、どうでしょうか。

ここの収蔵品の中には、上杉謙信の大馬印、上杉景勝の甲冑などがあります。また、軍旗は三本あります。一つは謙信が上洛した時朝廷から拝領した、紺地日の丸の旗です。二番目は「刀八毘沙門」の旗、そしてもう一つ、縦長の旗で、白絹地にたった一文字「愛」と書いたものがあります。縦長の旗に、なぜ愛宕大権現と書かないのか、「愛」の一文字を書くことが目的だったのかも知れません。

これは傍証ですが、確かなのは、上杉家の軍旗に「愛」の一字があったということです。すなわち、兼続の趣味などではなく、まさに上杉家を象徴するものとして存在していたということがはっきりわかります。



## ■ 愛と仁は同意義語

新渡戸稲造の『武士道』の中に出てくる「武士道を支える二つの柱」として、一つには「義」が掲げられています。これは謙信の言う義と同じ意味です。武士道そのものは江戸時代に大成されたもので、それを明治になってから新渡戸が書き表し、日本だけでなく世界で読まれ、ベストセラーとなったものです。それを考えると、武士道精神の先駆けとしての謙信の品格のある生き方を模索していた姿は、時代からすると異端であり、先端であったのでしょう。

そしてもう一つの柱として、「仁」を掲げています。これは義よりもさらに上にあるとしています。義と仁が備わって、初めて立派な侍であるということです。

新渡戸稲造は、この義と仁は、二文字になるとも書いています。「義」を二文字にすると「義理」。今日では、義理もバレンタインデーの「義理チョコ」に代表されるように墮落してしまいましたが(笑)、「義のことであり」です。そして新渡戸は、「仁」は「仁愛」となると言います。大学で漢文を専門に研究されている教授にお伺いしたところ、「仁愛」とは同意義語を二つ並べた熟語であり、それゆえこの二つは、ほぼ同じ意味であるということでした。

「愛」の本来の意味は、思いやり、情けです。そういう意味において、兼統の前立ては「仁」の一字でも同じ意味になります。新渡戸稲造の「仁愛」は、直江兼統の「愛民」とほとんど同じだと思います。

## 4. 兼統の学識と財政政策

### ■ 春日山は日本海側の文化の中心だった

直江兼統は、大変な学識を持っていました。兼統は、当時最高の儒学者であった藤原惺窩と交友がありました。のちに徳川幕府に仕える林羅山は、惺窩の弟子です。その惺窩ですが、戦国の武将を評して「学のあるのは五名のみ」と言っています。そのうちの二人が越後人で、上杉謙信と直江兼統を挙げています。いかに越後の文化的レベルが高かったかということです。実は『天地人』を書くうちに、上杉がいかにすごかったのかに、気がつきました。

当時京都は応仁の乱で焼け、戦乱を避けて多くの公家が地方に下向します。そうした公家を迎えた地方の大きな大名家、例えば今川、北条、そして日本海側の上杉などの城下には、平和と経済力がありました。そしてさらに文化のレベルが上がっていったのです。日本海側ではその中心が上杉、春日山、今の上越市でした。

戦国時代は地方主権の時代であった、そうみないと正しい歴史認識ができないことに気がつきました。そのことを私に教えてくれたのが上杉でした。

### ■ 兼統による米沢の財政再建

景勝、兼統主従にとつての最大のピンチは、関ヶ原の戦いにおいて西軍に味方したことでしょう。有名な「直江状」のエピソードも、このときのものでした。

この結果、上杉家は、会津120万石から米沢30万石、四分の一に減封されました。このとき兼統は、家臣団のリストラをしませ

んでした。大変なことになりましたが、兼続はここで、経済と義の両立を図っていくのです。財政改革を進めます。

まず、彼自身が身を正します。6万石の石高を5千石に減らし、皆に分け与えました。また、家臣の禄高を四分の一ではなく、会津時代の三分の一としました。家臣たちは喜びます。

次に、大胆な改革を次々に実行します。一つは、用水を引いての新田開発、二番目は金銀山開発です。上杉謙信が越後でやっていたことを、兼続は米沢で実践していくのです。

三番目に殖産興業、青苧栽培の奨励です。後に、米沢織という織物産業が栄えることになります。紅花、こうぞ、漆…換金性のある作物を次々と植えていきます。

その結果財政再建に成功し、米沢藩の石高は公称30万石でありながら、実高は51万石、そこに金銀山や殖産興業の経済活動で得た利益も合わせて、実質的には二倍以上にしたと言われています。

私は、家康に対して「直江状」をたたきつけた兼続も好きです。しかし、米沢で言い伝えられているもう一つの彼の姿、すなわち畑の土を舐めて地味を確かめながら、苦しい中逃げずに財政改革を成し遂げた姿に、越後人の粘り強さをみる思いがします。

## 5. 時代が見直した上杉の精神

最後に大河ドラマについてですが、巨匠、物故作家の作品が原作となることが多い中、まだ50代で現役の作家の作品が選ばれたことはほとんどないと思います。ですから、

大河ドラマの原作者が現れて講演するということは、ほとんどないですね。大変貴重な機会ということです(笑)。同じ越後で育った皆さんの前で、こうしてお話することができてうれしいです。

なぜ今「天地人」なのか、ということですが、私が越後人だから、そして上杉家という、現代人に欠けている精神を持った男たちの物語を書いたからだと思っています。そして、もちろん、地元の皆様の10年以上にわたる長い大河ドラマ実現運動の賜物であるのは、言うまでもありません。時代が、上杉精神を見直しつつある気がします。

今日は、上杉の心、兼続の心について語らせていただきましたが、本当はもっとたくさんお話ししたいことがありました。

ご興味を持たれた方は、ぜひ原作『天地人』を読んでいただければ、原作者としてうれしい限りです。小さい文字を読むのは辛いという方がいらっしゃいましたら、日曜夜8時からのNHKの大河ドラマを見ていただければ、原作者としてこれほどうれしいことはありません。

本日は、ご清聴ありがとうございました。  
(拍手)



文責 高橋 誠 (高26回)